

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

織機と織物と織り技術：共同研究： 手織機と織物の通文化的研究（2010-2013）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2013-02-25 キーワード: 作成者: 吉本, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4911

共同研究 ● 手織機と織物の通文化的研究 (2010-2013)

人類史の中核技術

織物を織るという技術は、人類が新石器時代に獲得した主要な生活技術のひとつであり、われわれの生活に不可欠の技術として、今も世界の広範な地域で継承されている。このことに異論はないと思われるが、織り技術が新石器時代から現代に至る人類史の中核技術のひとつとして位置づけられることについては、これまであまり知られていない。たとえば18世紀後半にイギリスで始まり、その後に世界に波及した産業革命のみならず、1980年代以降に急速に発展を遂げたコンピュータによって引き起こされたIT革命もまた織り技術と密接に関連している。産業革命は、イギリス国内産の羊毛や植民地であったインドからもたらされた綿花などから大量の糸を紡績し、それらの糸を使って大量の毛織物や綿織物などを織るために、それまでは手作業で生産されていた糸や織物が蒸気機関で稼働する紡織機械によって生産されるようになったことを契機として始まった。このことは多くの人の知るところである。しかし、IT革命が、19世紀初頭のフランスでジョゼフ・マリー・ジャカールが発明したジャカード織機(複雑な模様の紋織物を織るためのパンチカード・システムをそなえた紋織織機)の出現に起因しており、そのパンチカード・システムをもとにコンピュータが発明されたことを知る人はさほど多くない。

研究の目的と意義

本共同研究では、人類史の中核技術のひとつとして位置づけられる織り技術のうち、とくに手仕事としての織り技術に注目し、そうした技術を担ってきた道具としての織機(手織機、すなわち産業革命以降に使用されるようになった動力織機ではない織機)や、織機によって織られてきた織物を研究対象として、それらの通文化的、かつ歴史的な展開をあきらかにすることをおもな目的としている。そしてさらに、産業革命やIT革命にともなって進展している機械化や大量生産によって、人類が古代から培ってきた手仕事の存続が危ぶまれる今日的な状況についても留意し、今後のデジタル化時代における手仕事というアナログ・システムのあるべき姿を模索し、提言することも試みる。

本共同研究は、2010年10月に始まったばかりである。したがって、成果の多くは、今後の研究に委ね

ざるをえないが、織り技術を人類史の中核技術のひとつとして位置づけ、織機、織り技術、織物を世界的な視野から網羅的に解明しようとする試みは、これまでに例のない先駆的研究としての意義をもつ。また、織機は織物を織るためのモノであり、織物は織るという技術で生産されたモノであるが、これら双方のモノに密接にかかわっている織りという技術をリンクさせた通文化的研究の方式は、今日の日本の文化人類学において停滞している物質文化研究を活性化させるために貢献するという意義もそなえている。

研究の実績と成果

本共同研究は2010年10月から2014年3月までの3年半を研究期間として予定しており、これまでに実施

した研究会は以下のとおりである。

2010年10月2日(土)、3日(日) 国立民族学博物館
筆者が共同研究の趣旨説明をおこない、研究会のメンバー全員が研究状況を紹介したのち、今後の研究計画や特別展について、全員で討議した。また筆者が「織物と織機」について発表し、これに関しても全員で討議をおこなった。

2010年12月18日(土) 沖縄県立芸術大学
柳悦州が「沖縄の天秤腰機と紋織の復元」について発表し、全員で討議をおこなった。また、筆者が「恵庭市出土の縄文時代の編布」について発表し、全員で織物以前の布について討議をおこなった。

2010年12月19日(日) 沖縄県南風原町
南風原文化センターで特別展に借用を予定している織機と織物について全員で討議をおこなった。また、まゆ織工房で「あげずば織り」の織機、織物、織り技術、絹糸について全員で討議をおこなった。

上記の共同研究会の発表や討議では、織機、織物、織り技術

について、過去にはほとんど注目すらされていなかった幾多の課題が浮き彫りにされ、さまざまな問題提起や討議がおこなわれた。以下は、そうしたなかで提起されたおもな事柄である。

ワラジは織物—これまで編物と考えられてきたモノのうちに、織物として位置づけるべきものが多く見出される。具体例のひとつはワラジ(草鞋)であ



腰機で輪状に織り上げられたタテヨコ縞(インドネシア、バリ島トゥンガナン村)。



固定式の綜紵をそなえた地機で輪状の織物を織るボンダ人の女性(インド、オリッサ州)。

り、筆者が提示している「織物とは、糸、あるいは、糸に類する線条物を経糸と緯糸とし、あらかじめ直線的に配置され、張力をそなえている経糸に対して、緯糸を直線的に交叉させることによって組織された製品である」という織物の基本概念(吉本 1987)にもとづけば、ワラジは織物として位置づけられる。

織物のかたち—織物のかたちはわが国では一般に、矩形であると理解されてきた。しかし、世界各地で織られてきた織物のうちには、矩形の織物以外に、輪状の織物、枝状の織物、管状の織物、楕円状の織物、鬘状の織物など、多様な形状の織物があり、前記のワラジは楕円状の織物のうちに包括される。

織機の分布と織物文化圏—腰機、地機、錘り機、足機などの織機は、新大陸以外では、歴史的にそれぞれの織機型式が異なった地域に分布し、それぞれが独自の織物文化圏を構築してきたと考えられる。

腰機から高機へ—現代の汎用的な織機として世界各地で使用されている高機(杵機の一型式)は、中国起源の腰機から発展した型式である可能性が大きく、高機が出現した時期は漢代、もしくはそれ以前にさかのぼると考えられる。

新大陸の織り技術—新大陸における織り技術は、これまでの考古資料の出土例にもとづけば、新大陸で独自に発生した可能性が大である。

ゴザやムシロを織る技術—最近のわが国での考古資料の出土例や東アジア、東南アジアの近・現代の織機型式があきらかになるにしたがって、木綿、麻、絹をはじめとする繊維素材で織られてきた一般的な織物(おもに衣料素材としてもちいられてきた織物や敷物としてもちいられてきた絨毯など)を織る技術と、ゴザやムシロを織る技術は、まったく別系統の織り技術として展開してきた可能性が大きい。またゴザやムシロを織る技術は、とくに東アジアと東南アジア大陸部で発達を遂げてきたと考えられる。

沖縄の腰機—わが国で使われてきた足引き式の開口装置をそなえた腰機は、一般に綜統は1枚のみであるが、沖縄ではそうした腰機の他に、紋織物を織るために2枚の綜統をそなえた腰機が1940年頃まで使用されていた。

研究組織と今後の計画

本共同研究の研究組織は以下のとおりである。

[研究代表者]

吉本 忍 (国立民族学博物館民族文化研究部教授)

役割分担は総括。1970年以来、世界各地で染織文化や染織技術について、調査・研究をおこなっている。

[研究分担者]

上羽陽子 (国立民族学博物館文化資源研究センター助教)

役割分担は南アジア、西アジアの織機と織物と織り技術。1997年以来、おもに南アジアや西アジアで染織文化や染織技術について、調査・研究をおこなっている。



竹筒製の開口筒綜統をそなえた杵機でゴザを織るタイ・ブアン人の女性(ラオス、シェンクアン県)。

井関和代 (大阪芸術大学芸術学部教授)

役割分担はアフリカの織機と織物と織り技術。1970年以来、おもにアジア、アフリカで染織文化や染織技術について、調査・研究をおこなっている。

内海涼子 (大阪成蹊大学芸術学部教授)

役割分担は東南アジアの織機と織物と織り技術。1979年以来、東南アジアで染織文化や染織技術、服飾文化について、調査・研究をおこなっている。

大野木啓人 (京都造形芸術大学芸術学部教授)

役割分担は特別展における織機と織物の演示と社会連携。1982年以来、数多くの展覧会などの演示活動をおこなっている。

金谷美和 (国立民族学博物館外来研究員)

役割分担は南アジアの織機と織物と織り技術。1997年以来、おもに南アジアで染織文化や染織技術、手工芸などについて、調査・

研究をおこなっている。

ひろいのぶこ (京都市立芸術大学美術学部教授)

役割分担は東アジアの織機と織物と織り技術。1974年以来、インド、韓国、日本その他で染織文化や染織技術について、調査・研究をおこなっている。

藤井健三 (財団法人西陣織物館顧問)

役割分担は日本の織機と織物と織り技術。1970年以来、京都をはじめとする日本の染織文化や染織技術について、調査・研究をおこなっている。

柳 悦州 (沖縄県立芸術大学附属研究所教授)

役割分担は中央アジア、西アジア、東南アジア、日本の織機と織物と織り技術。1978年以来、おもにラオスをはじめとする東南アジア、中央アジア、西アジア、東アジアなどで染織文化や染織技術について、調査・研究をおこなっている。

本共同研究は、2010年度末の2011年3月に民博で研究会を開催し、その後においては、各年度ごとに2日にわたる研究会を5~6回程度開催する予定である。そして、本共同研究の研究成果の一部は、共同研究の3年次にあたる2012年秋に開催を予定している特別展「世界の織機と織物(仮称)」の展示と、その展覧会の解説書として公開する計画である。さらに4年次においては、別途日本語と英語による成果報告の公開準備をおこない、共同研究会終了後に成果報告書の出版をおこなう計画である。

【参考文献】

吉本忍 1987『手織機の構造・機能論的分析と分類』『国立民族学博物館研究報告』12(2):315-447。

よしもとのぶ

民族文化研究部教授。専門は民族技術、民族美術・工芸。著書に『インドネシア染織大系(上巻)』(紫紅社 1977年)、『インドネシア染織大系(下巻)』(紫紅社 1978年)、『インドネシアの金更紗』(講談社 1988年)、『ジャワ更紗』(平凡社 1996年)、『続シルクロード織機研究』(柳悦州と共編著 シルクロード学研究センター 2006年)など。